

# 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 匹田剛



学位申請者 堀口大樹

論文名 ラトヴィア語の動詞接頭辞付加 — 空間・時間・感情を表示する言語活動 —

## 結論

堀口大樹氏から提出された学位請求論文「ラトヴィア語の動詞接頭辞付加 —空間・時間・感情を表示する言語活動—」について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は博士(学術)の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

なお、審査委員会は匹田を主査に、副査として学内より風間伸次郎教授、金指久美子准教授、学外より中澤英彦(本学名誉教授)、櫻井映子(本学非常勤講師)の各先生を迎え5名で構成された。

## 論文の概要

本論文は、ラトヴィア語における動詞の接頭辞付加に関する、主としてアスペクト論の観点からの記述的研究である。規範主義的な観点から従来しばしば批判されてきた接頭辞付加によるアスペクトの対立など、旧来のラトヴィア語学であまり深く研究されてこなかった様々な現象に関する初めての広くかつ深い記述として大きな意義のある研究であると考えられる。また、本論文で資料として扱っている言語データのほとんどは新聞、雑誌、ラジオと言ったマスメディアから氏が独自に収集したものであり、その地道な努力は賞賛に値するものである。その独自の資料に依拠した本論文はまず何よりも一次的な記述としての価値が大きい。

本論文の第1章「ラトヴィア語の動詞接頭辞の概略」では先行研究に従いラトヴィア語の動詞接頭辞について概観が成されている。動詞接頭辞は空間的意味、量・時間的意味、形式的意味の3種類の意味を持ち、量・時間的意味は、動作の集中性の高低や動作の開始などの意味であり、形式的意味は基動詞をPFV(完了アスペクト、完了相)化し、アスペクトの対立に関わるものであるが、その一方でこれら3つの意味の境界はしばしば連続的であることなどが示されている。

第2章「ラトヴィア語のアスペクト」は先行研究で指摘されてこなかった問題を中心に、ラトヴィア語のアスペクトを概観している。ここでは、様々な事例にあたることによって、

ラトヴィア語におけるアスペクトの対立はしばしば文脈などの助けが無くては特定することができず、あくまで相対的なものであることを論じている。

第3章「借用語の動詞の接頭辞付加」では、現在進行中の生きた言語活動としての接頭辞付加を観察するために、借用語動詞に対する接頭辞付加に関する複数の現象を観察し、分析を加えている。まず、3.2.では、借用語の動詞の接頭辞付加の動向をウェブ上のサイト「新聞図書館」から集めた用例に基づいて概観している。次に3.3.では生産的かつ創造的な語形成のプロセスである借用語に対する接頭辞付加は、類推のメカニズムに基づいて行われていることを論じている。次に3.4.において、氏が「接頭辞クリップ」と呼ぶ、同一テキスト内で複数の動詞に同一の接頭辞が付加される現象が概観されている。そして、3.5.では、接頭辞 no-を借用語動詞に付加することにより PFV 化するというプロセスは、規範主義の立場から、とりわけ基動詞の意味に PFV 的意味が認められる場合に、批判されてきているが、この接頭辞を付加することによって、接頭辞動詞はより PFV 化され、それに伴い基動詞が相対的に IPFV (不完了アスペクト、不の完了相) 化されることを豊富な例により示し、規範主義的な批判には正当性がないことを示した。また、この再解釈を元に、PFV の no-動詞を中心に、PFV/IPFV の意味対立、統語的特徴、モーダル的特徴を論じ、さらにこの接頭辞 no-が他の接頭辞と比べ「より形式的な」接頭辞であることを論じている。

第4章「動詞接頭辞付加の感情的側面」では、動詞の縮減アスペクトを名詞の指小形と関連させた上で、客観的量的評価と主観的・感情的評価にしばしばつながりがあることを示し、ラトヴィア語の pa-動詞の時間限定アスペクトが名詞の指小形の示す客観的小ささに例えられるのに対して、縮減アスペクトが話者が動作を心理的に軽く捉えることから指小形が示すより主観的側面に相関していると論じている。さらにこのようなことを豊富な具体例に基づいて示し、その考えで pa-動詞の用法を詳細に記述し、客観的、主観的双方の側面から分類している。また指小形、pa-動詞ともに言語文化論では批判されることがあり、文の命題的意味に大きく影響を与えない主観的評価の表示が社会的・文体的に制限が加えられていることも論じている。

第5章「コミュニケーションにおける接頭辞の諸相」では、接頭辞動詞に関わる語形成関係を(1)基動詞と接頭辞動詞、(2)同じ接頭辞を持つ異なる基動詞、(3)異なる接頭辞を持つ同じ基動詞の3つに分類し、それらの語形成関係が一つのテキストや発話の中で顕在化する例を話し言葉と書き言葉の双方において考察し、その中で、単なる訂正だけではなく説明的・補足的性格を持つ言い換えや類義要素の追加を含めるものと筆者がとらえる接頭辞動詞の「言い直し」が「接頭辞の選択」の問題を提起し、接頭辞付加が話者主体の活動的な性格を持っていることが体现していると論じている。

## 審査の概要及び評価

本論文は、規範主義的な否定的な見解などの影響を受けて、ラトヴィア語学の中でも従

来ほとんど研究がなされてこなかったラトヴィア語の動詞接頭辞付加について世界ではほぼ初めての体系的・網羅的な言語学的研究であり、氏が独自に集めたデータに基づく地道な記述的研究として、その存在自体に意義がある論文であると言える。

非ラトヴィア人の研究者としては希有とも言える語学力を持つ堀口氏の研究スタイルは、特定の抽象理論に不用意に傾倒し安易な一般化を行うことなく、膨大な一次データを独自に収集し、様々な現象を客観的な目で見つめ考察した記述的研究のそれである。そのデータに向き合う姿勢は審査委員会で高く評価された。とくに、借用語動詞の接頭辞付加を記述した3章、動詞接頭辞付加の主観的側面と客観的側面の関係を示した4章、接頭辞の果たすコミュニケーションにおける役割を明らかにした5章はいずれも氏の独自の新しい記述であり、これらの章に対する評価は高かった。

また、氏は先行研究に十分に当たった上で、独自に収集・整理した一次資料に時には計量的な考察も加えるなど先行研究とは異なる斬新なアプローチを行った上で従来にはなかった新しい知見に達している。これらの成果は日本国内のみならずラトヴィア本国でも評価されるべき研究であろうとの指摘もなされた。

以上のように本論文は審査委員会において高く評価されたものの、いくつかの改善すべき点についての指摘もされた。それらのうち、とくに重要なものを以下に示す。

[構成や形式について]

- ・論文の構成が若干わかりにくい。章の並べ方などがもう少し上手ければもっと理解しやすい論文になったであろう。
- ・文章が十分に推敲されているとは思えない箇所が散見された。その中には用語の使用が不適切であったり、定義が十分になされていない、と言った問題も含まれる。少なくとも概念や用語の明確化や厳密化は早急に対処が必要な課題であろう。
- ・本稿においてはしばしばスラヴ語のアスペクト論に言及しながらラトヴィア語のアスペクトの問題を論じているが、スラヴ語に関する議論とラトヴィア語に関する議論の区別が必ずしも明確ではなかった。両者の混在は避けるべきである。
- ・先行研究に対する本論文の位置づけがわかりづらい部分が見られた。例えば、規範主義的な先行研究として言語文化論に対する記述言語学的立場からの批判的な主張が本稿では繰り返し述べられているが、批判対象としての言語文化論に関する説明が十分になされていたとは言えない。言語文化論をよりわかりやすく説明してくれていれば、氏の主張もより説得力を増していたと思われる。
- ・また、言語文化論を強く批判しているが、むしろ言語学の論文としての本論文で批判すべきは旧来のバルト語、スラヴ語のアスペクト論なのではないか、との指摘もあった。

[今後の課題について]

- ・本稿は一時的な記述という点で非常に重要な意義のあることは既に述べたが、その一方

で今後の課題として、理論的・説明的な発展や精密化の余地があることがいくつか指摘され、以下のような疑問・要望が出された。

- (1)本論文では「新聞図書館」というサイトを電子コーパスとして利用することによってデータを集めているが、そのサイトのコーパスとしての限界による問題点がいくつか見られた。
- (2)理論的な枠組みを持った方が良いのかも知れない。
- (3)アスペクトと接頭辞に関して氏が概観している動きは、ラトヴィア語の内在的変化なのか、それとも外在的要因から起こっていることなのかを明らかにして欲しい。
- (4)言語の意味を扱う以上、意味規定を限りなく科学的に行う必要がある。PFV/IPFVのどちらかという判断においてもこれは同様である。
- (5)一般アスペクト論に関する欧米の研究が十分にフォローされていない。ラトヴィア語のアスペクトの本質は何か？他の言語とは何が違うのか、など一般理論をフォローした上で明らかにして欲しい問題もある。
- (6)規範主義を批判しているが、ラトヴィア語の規範や標準語などのあり方、その成立に関して不明確な点が見られた。場合によると本論文は標準語形成という面から見ることにより新たな発展の可能性もあるのかも知れない。

以上、各委員から形式的側面と今後の課題を中心に要望や意見が出されたが、これらはいずれも氏の論文の意義を高く評価した上でのものであり、建設的な提言ばかりである。

また、最終試験における質疑においては、氏の応答は的確であり、氏が自身の問題点をはっきりと自覚し、今後の発展に取り組む強く具体的な意志も感じられ、今後の研究者としての活躍が期待できることを伺わせた。

本審査委員会は、学位請求論文の内容、ならびに最終試験の結果より総合的に検討した結果、全員一致で堀口大樹氏の学位請求論文「ラトヴィア語の動詞接頭辞付加-空間・時間・感情を表示する言語活動-」が博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるという結論に達した。